修 士 論 文 要 旨

学籍番号	第 20GH103 号	氏 名	齋藤 佑真
人文社会科学専攻（コース：文化芸術コース）			

論文題目：聴覚的空間論 -マクルーハンのメディア論とシェーファーのサウンド・エデュケーションを基盤とした「音そのもの」への立ち合い-

COVID-19の流行は、社会の身体的なつながりや生活基盤を解体し、学校の授業や仕事は一部遠隔で行われることになった。それまでの様々なコミュニケーションは、新たに強いられた環境によって至るところで軋轢を生んだ。音楽教育では、実技における飛沫防止など様々な対策や、ZOOM等のオンライン会議システムを活用して授業をすることが身近な方法の一つとなり、現在ITを活用した様々な音楽活動が試みられている。しかしそのほとんどは、これまでと比較して不都合を伴う活動であるにも関わらず、新しい技術を以前の延長線上で捉えるものだ。これまで私たちが「音楽」、また「音楽教育」をどのように捉えていたのか。これを再考するきっかけを、ITによる音楽教育の違和感に見出していく。

本論文の研究目的は、カナダの英文学者マーシャル・マクルーハン（1911-1980）のメディア論と、同じくカナダの作曲家R.マリー・シェーファー（1933-2021）のサウンド・エデュケーションを基盤として、ITを活用した音楽活動が私たちにもたらす変容について考察し、今後の音楽教育について考えていくことである。そのため本研究の方法は文献調査とした。

まず初めにマクルーハン理論の読解を行い、「メディアはメッセージ」を始めとする彼のプローブという手法が目指した物事の新たな把握の可能性について考察した。マクルーハンはメディアを人間の身体や感覚を拡張するものと定義し、メディアが伝達する「内容」ではなく、そうした内容の伝達を可能にするメディアの「形式」そのものの重要性を説く。彼はプローブという手法を使い、文字文化によって凝り固まった事物への視点に対し、人々の関与を促すことでそれを解体しようとしたことが明らかとなった。

次に、マクルーハンとその息子エリックによって仕上げられた『メディアの法則』の読解を行った。そこでもマクルーハンらは「新しい科学」というプローブを用い、これまでの科学という前提に対して、あらゆるメディアを修辞学的研究の対象として理論化した。メディアは言葉同様に人間が内部から発したものであり、言語同様、修辞学研究の対象となりうると考えたのだ。本論文では、ITを活用した音楽教育の事例を『メディアの法則』に当てはめて考えることで、現状の違和感や新たな可能性について、ひとつの結論付けを行った。ITによって表面化する私たちの感覚麻痺は、新たな音楽教育の可能性によって反転し、私たちに「聴覚的空間」を認識させることが分かった。

これらのfindingsを踏まえ、次にマクルーハンのいう「聴覚的空間」について考察した。マクルーハンは「聴覚的空間」を、言葉を介さない電気のテクノロジーがもたらす身体の拡張に見た。彼はテトラッドによって、あらゆる人工物、つまりメタファーという知覚を、視覚的空間から聴覚的空間へと引き摺り出そうとした。視覚文化によって「音楽」から排除されてしまった「聴覚的空間」、つまりそれは「音そのもの」の把握である。最後にマクルーハンとシェーファーのつながり、シェーファーのサウンド・エデュケーションについて考察を行い、両者の親和性から「音そのもの」の把握についてまとめた。

以上の考察を振り返り、結論としてマクルーハンとシェーファーの教育観に共通する点を見出した。それは、これまでの「教育」における効用、上下関係、箱詰め型といった固定化された視点ではなく、「聴覚的空間」の把握に根ざした教育の在り方である。このような「新しい教育」の可能性を探るため、今後自身の実験的試み、プローブを積み重ねる必要がある。